

●シンポジウム

「創造・伝達・記憶の場としての版画」

日時：二〇一五年一月五日（土）十時～十八時

場所：明治学院大学白金校舎二号館二三〇二教室

緒言

この二十年のインターネットの発達はめざましい。個人が発信した情報がまたたくまに世界中に広がり、我々は膨大な情報の洪水の中で暮らしている。さらにデジタル化の波はあまりに巨大で、紙という媒体そのものを呑み込もうかとする勢いである。まさにこのような現代だからこそ、マスメディアの始まりである「版画」をとりあげて論じる意義があるのではないだろうか。

比較的安価な支持体である紙に主に刷られてイメージを複製化する版画は、持ち運びがたやすいことから、遠く離れた地域の人々が同一のイメージを共有することを可能とした。手による筆写、模写という手段しかなかった一五世紀初めに登場したこの「ニューメディア」は、まもなく人々の生活に浸透し、その意識にも変革をもたらした。それは、無限に広がるインターネットの可能性によって無意識のうちに変化している現代生活の状況に喩えられるかもしれない。そして版画は、一九世紀前半に写真という機械的複製が登場するまで、イメージを複製する唯一の方法だったことを思い起こさねばならない。何百年もの間、手作業で行われる版画はイメージの強力な伝達手段だったのである。

ヨーロッパにおける版画の歴史をふりかえれば、ドイツが重要な貢献を果たした事実を否定することは

できない。一五世紀なかばにグーテンベルクがドイツで発明した活版印刷術は「メディア革命」と呼ばれるが、それに先立つ一四三〇年代のライン中流地方での銅版画の登場、そして一四二〇年頃の東南ドイツ地方での木版画の誕生こそメディアにおける真の革命であったとも言える。さらにドイツの国民的芸術家であるアルブレヒト・デューラーは、画家であり版画家であった。彼は、その銅版画と木版画の技術と表現においてひとつの頂点を極め、版画を芸術的なジャンルとして確立したといっても過言ではない。またドイツでは、他国とは異なり、いわゆるデューラー時代に多くの主要な画家が版画を手がけたことは特筆すべき点である。

写真の登場によって、版画は複製手段としての役割を失う一方で、その芸術性を再認識する動向がヨーロッパ各地で興った。そうした中で、エルンスト・ルートヴィヒ・キルヒナーは初期木版画に大いに影響を受け、自身のアイデンティティを「ドイツの古き木版画」に求めた。デューラー以前の初期木版画に現代的な表現を見いだしたこのドイツの芸術家は、新たな視点からドイツ版画の伝統を意識したと言えるだろう。

従来の美術史研究においては、版画は、概して芸術的価値を認められた作品が単独に扱われるか、あるいは芸術作品の源泉を検証する補助的な存在として取り上げられることが多かった。しかしながら、近年、版画の多様なあり方、その機能や受容の仕方にも光を当てた研究が進展し、その成果を世に問う展覧会も開催されている。我々が通常目にするのは、もともとのコンテクストから引き離された、鑑賞の対象物としての版画である。しかし版画は、本来さまざまな目的や機能をもっていた。たとえば、キリスト教の信仰を促すものや学術的な成果を示す図解、あるいは広く流布した手本やプロパガンダとしての利用などがあげられる。さらに古版画から遠い過去のイメージが新たに形成される場合もある。

こうした研究や関心の動向を踏まえ、本シンポジウムでは、版画をより広い視野とより多角的な観点で捉えることを目指している。本シンポジウムにおける各発表とディスカッションが、版画のもつ豊かで多義的なイメージの力を再認識する機会となり、そして版画芸術が果たす今日的な意義を議論する場となることを、主催者一同願っている。

(保井亜弓・大原まゆみ)